©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所　湯川記念館史料室

（第3種郵便物認可）

学芸

1975.8.25 毎日 夕刊

# 核軍縮への新しい構想

## 第25回パグウォッシュ・シンポジウムのめざすもの

◆豊田 利幸◆

## 人類への忠誠を最優先に

歴史をみると、圧政や収奪に対しては必ず抵抗運動が起こり、多くの痛ましい犠牲が払われながらも、そしてジグザグのコースを辿りながらも、人権の擁護は長期的展望に立てば勝利の方向に向かっているように思われる。

人権の抑圧はさまざまな形で、今日も続いている。多くの人はまだ肌で感ずるまでに到っていないが、今日われわれの人権を抑圧している最大なものの一つは、次にのべる理由により、核兵器体系によるものである、といってよいだろう。

### 「デタント」の裏で核抑止体制は強化

最近、さかんに言われる米ソ間の政治的「デタント（緊張の緩和）」とはうらはらに、米ソの超大な核軍備による、いわゆる「核抑止」体制はますます強化されてきている。「核抑止」とは核兵器体系の威嚇によって「恐怖の均衡」を保とうとすることであり、相手国の多数の市民を人質にして「平和」を維持しようという発想から生まれたものである。

核兵器体系という言葉を用いたのは、今日の核戦略体制を考える場合、単に核爆弾だけを問題にするだけでは、事態を正確に把握することができないからである。固定型、移動型を問わず、核ミサイル発射装置は早期警戒網、指揮命令系統等と密接に連繋して作動するようになっている。これは戦略、戦術核兵器についても同様である。

ますます多様化し、かつ巨大化した核兵器体系は、それが短時間にそして有効に機能するように、いいかえれば分秒の単位で即応できるように、コンピューターでシステム化されている。これは想ひうる事態をいくつか予想し、それに対してプログラムを作っておくことを意味する。だが、われわれ人間が、起こりうるすべての事態を予想して、それらに完全に対処できるプログラムを作っておく、というようなことが果たしてできるだろうか。

かりにそれができたとしても、われわれ人類全体の運命を、少数のテクノクラートが密室で作ったいくつかのプログラムに委せる、ということは人権の根源的抹殺ではないだろうか。これと前に述べた「人質論」とあわせて考えると、核兵器体系は今日、最も恐るべき人権の抑圧を大規模な形で行っている、といわざるをえない。

核兵器による恐怖の均衡が構造的に、たえずそれをつき崩し相手より優位に立とうという要因を含んでいることは、米ソ間のこれまでの核軍備競争を見れば明らかである。これを無視して、核軍備を静力学的に管理しようという軍備管理論者の考えは彼等のうたい文句「核軍縮は非現実的で、軍備管理こそが現実的である」にもかかわらず、かえって非現実的であるといわなければならない。

来る八月二十八日から五日間にわたって京都で開かれる第二五回パグウォッシュ・シンポジウムは、日本で初めての国際的パグウォッシュの催しである。

その主題として「完全核軍縮への新しい構想」が選ばれた意味は重い。シンポジウムを実りあるものにするため、参加者の数は余り多くはないが、非核保有国、第三世界からの参加者の活発な発言が期待されている。

核軍縮はいうまでもなく核保有国自身がこれを行うべきものである。したがって核保有国の国民の中に、核軍縮が彼等にとっても必要であり、また彼等自身にとって賢明な選択である、という世論を作りあげることが一見、迂遠なようであるが、最も着実な道である。

### 「核兵器廃絶」の声、保有国にも

もちろん、現在の核保有国は彼等なりの理由をつけて核兵器開発を行い、それを自国民に宣伝してきたから、他国の核兵器開発を非難するときはともかく、核兵器を今すぐ絶対的に否定する立場は、為政者としてはといにくいかもしれない。しかし最近になって、核保有国のしかも核兵器開発の指導的立場にあった人のなかから、核抑止の考え方は「究極的不条理」に導かれ、核兵器の廃絶がどうしても必要である、と公言する人があらわれ始めている。

しばしば、非核保有国ことに小国は、核軍縮について何ができるだろうか、という悲観論が出されてきた。政府レベルで考えると、そして過去の軍縮交渉を見ると、これを一概に否定することはできない。また核保有国の人々がそれぞれの国家に対する忠誠と、人類に対する忠誠の分裂に悩む気持もわからないではない。しかし、水爆の出現を機に、一九五五年、バートランド・ラッセルは深い洞察をもって、人類に対する忠誠こそ最優先しなければならないと訴えていた。ルーズベルト米大統領に原爆開発を進言したアルバート・アインシュタインはその時死の二日前であったが、直ちにこれに応じた。そしてさらに九人の著名な自然科学者が署名に加わった。今日「ラッセル・アインシュタイン宣言」と呼ばれる、この歴史的訴えが出されてすでに二十年が経過し、生存している署名者は湯川秀樹、ライナス・ポーリング、ジョセフ・ロートブラットの三人だけとなった。

### ラッセル・アインシュタイン宣言に戻り

この「宣言」の呼びかけに応じて、一九五七年七月、カナダのノヴァスコシア州の小さな村パグウォッシュに十カ国から二十二人の科学者が集まった。日本からは湯川秀樹、朝永振一郎、小川岩雄、そして中国からは周培源の諸博士が参加した。これが第一回パグウォッシュ会議である。今度開かれるパグウォッシュ・シンポジウムは「ラッセル・アインシュタイン宣言」にあらためて光をあて、核軍縮の基本的構想を練ることを目的としている。そしてできるだけ第一回パグウォッシュ会議に近い組織運営の準備がなされてきた。海外から約三十人、国内から十一人の物理学者、生物学者、国際政治学者、経済学者等の参加が予定されている。

平和運動にはさまざまな形態がありうるし、それらは相互に補完しあい、強化しあって、共通の目的に向かって、すなわち平和時代を創造するために、進められるべきであろう。「パグウォッシュ運動」もその中に位置づけられる。その中心的課題はいかにして完全核軍縮を達成するかにある。その展望の中には通常軍備も含む全面完全軍縮、さらには戦争の絶滅がある。

街を歩いている大多数の人々、そして茶の間でテレビ映画に興ずる人々には、核戦争の危険はほとんど実感として湧かないかもしれない。しかし米ソ核超大国が核兵器開発競争を精力的に進め、次々により強力な核兵器体系を作りだしつつあることは事実である。一方、核保有への誘惑と可能性もますます大きくなってきている。核軍縮は文字通り無眉の急である。

今回のシンポジウムもパグウォッシュの慣例に従って非公開で行われるが、九月二日には京都・山一ホールで午後六時から、また九月三日には東京・千代田公会堂で午後五時半から、それぞれ組織委員会主催の一般講演会が開かれる。講師および演題は追って新聞等でお知らせする予定である。御来聴を。

（とよだ・としゆき＝第二五回パグウォッシュ・シンポジウム組織委員会事務局長・名古屋大学教授、物理学）

c092-17-040